３つの目で見た郷土香川《第２０回》

～手袋の里　白鳥紀行～

東かがわ市の旧白鳥（しろとり）町は、国内有数の手袋の産地であり、今回は手袋資料館と手袋神社を訪れてきました。

手袋資料館は、手袋生産のおいたち、素材や道具、手袋の種類などを展示しており、手袋についての理解が深められると思われます。

まず展示室入口付近には、日本手袋工業組合所有の手袋制作用具や製品が平成 26 年 2 月 24 日に国の登録有形民族文化財に登録された事が紹介されています。そして展示室に入ると、スポーツ選手の手袋の展示ですが、自動車レーサー、スキージャンプ、フェンシングなど種目が多岐に渡っていました。手袋の素材も革手袋１つとっても、牛、羊、鹿、オーストリッチ、クロコダイル、その他天然繊維、化学繊維など幅広く目移りしそうでした。手袋製作道具は、素材から手袋の大まかな形を裁つための木製や鋼製の道具、指毎に裁つための裁ち包丁（年に１本は取替）、またミシンの展示は複数あったが、軽便飾縫ミシン（棚次辰吉（たなつぐたつきち）発明）、一本マツイ縫ミシン（ミシン針が水平に動くミシン）が目をひいてしまいました。手袋生産のおいたちについては、パネルや資料の展示、関係図書等の閲覧が可能となっています。

この資料館に併設されているてぶくろ直売所は、手袋はいろいろな素材の多種多様な種類、また手袋の裁縫技術を活用したハンドバッグや小物バックなどもあわせて産地直売なので、一般の小売店よりはおサイフに優しいですね。そしてこの直売所の商品棚は一風変わっています。意外なものを活用されていました。

次は手袋神社です。白鳥神社本殿の裏（北側）の境内にある広い松原の中にあると紹介されています。白鳥の松原の北側に沿って県道 122 号線が東西にあり、『白鳥の松原』という標識があるところの裏参道入口から直進すると向かって左側（東側）に、本誌表紙写真の背後が見えてきます。そこが地元では手袋神社とされているところですが、鳥居や本殿はないのでややもすれば目立ちませんが、1934（昭和 9）年建立の両児舜礼（ふたごしゅんれい）の記念碑、1957（昭和 32）年建立の棚次辰吉の銅像などがあり、雰囲気を醸し出しております。

さて当地における手袋生産の始まりについて見ていくことにしましょう。創始者である両児舜礼は 1853（嘉永 6）年に松原村（現東かがわ市松原）で棚次良学（幼名を米

Copyright(C) 2016 香川県社会保険労務士会.All Rights Reserved

棚次辰吉の銅像の手には手袋が握られてます

吉）として生まれ、1864（元治元）年に備前児島八浜村の金剛寺の両児舜行に弟子入りしました。様々修行を経て、1883（明治 16）年に白鳥村の千光寺副住職に就任、ところが 3 年後には還俗（げんぞく／僧侶をやめる事）、三好タケノと大阪に逃避行、生活の糧にタケノは手回しミシンでメリヤス製の指なし手袋（テグツ）の工場に働きに行くようになり、舜礼とタケノは 1888（明治 21）年には家業として専念しました。1891（明治 24）年に両児舜礼は父利平の仏事に際して松原村に帰郷、手袋のおかげで村人に暖かく迎え入れられ、いとこの棚次辰吉（1874（明治 7）年～ 1958（昭和 33）年）、タケノの親類を２人を共にして大阪に帰り、ますます手袋経営に乗り出しました。ところが半年後の同年 6 月 24 日に脳涙結昌病で 39 歳でその生涯を閉じました。

この手袋事業を引き継いだ棚次辰吉は、1892（明治 25）年に大阪で手袋製造業として独立開業と共に故郷の同業者の育成も開始し、1899（明治 32）年に松原村に成功者として帰りました。辰吉は、辰吉の恩師である教蓮寺（きょうれんじ）住職楠正雄（しょうゆう）、資金は檀家総代で、また塩田大地主・松原村村長の橋本安兵衛、縫製指導は明石タケノ（舜礼没後に再婚）と共同で積善（せきぜん）商会という手袋製造所を開設しました。これが現在に至るまで続いている手袋生産地としての本格的始まりでもありました。

当地で手袋生産が定着し始めた背景として、明治初期まで継続していた塩田での製塩業、また砂糖の生産も盛んであったが、いずれも安い外国産に押されてしまい衰退してしまったこと。そして当地にある白鳥神社は江戸幕府からの御朱印地であり、高松初代藩主松平頼重候より 200 石の寄進を受け、神社自身自治もしていたが明治になりそういう特権もなくなり、門前町が衰退していった事も原因とされています。そういった状況を打開しようと見つけたのが手袋製造ではないかと思われます。

このようにして開始された手袋製造は、1988（昭和 63）年には 100 周年を迎え、次の 100 年を歩んでいる現在の状況は、東かがわ市とさぬき市（旧大川郡）にある日本手袋工業組合加入企業はほぼ 9 割とされているので、全国の手袋生産高に占める割合の高さは想像できます。防寒具としての手袋から単価アップの高級化や新素材での手袋生産に移行し、またスポーツ選手向けの手袋、手袋をしたままでもタブレット端末を操作できる手袋など新需要への対応も進んでおります。脱手袋として、手袋で培われた技術を活用してホームカバーやカバン・ハンドバッグなどの小物品の製造もされ、手袋とプラスの製造という経営もなされています。また海外に進出し、生産拠点は海外企業との合弁、委託、業務提携などの形で海外に置き、国内（本社）は商品の開発や経営の拠点が主となっている企業も存在しています。こういうのがてぶくろ直売所の商品にも反映されているそんな気がします。

《参考資料など》

白鳥町史（1988（昭和 63）年／白鳥町（現東かがわ市）発行）　手袋の祖・両児舜礼（2002（平成 14）年／松村哲夫著）　手袋百年誌（1988（昭和 63）年／日本手袋工業組合発行）　東かがわ手袋産地の変容（2012（平成 24）年／細川進著）　放送大学創立 30 周年記念公開シンポジウム報告書『平賀源内から手袋産業へ～地域産業の再発見～』（2014（平成 25）年／放送大学香川学習センター）　グローブミュージアムＨＰ（日本手袋工業組合ＨＰ）

《手袋資料館のご案内（右写真参照）》

所 在 地　香川県東かがわ市湊 1810 － 1
開館時間　9:00 ～ 17:00（受付は 16:30 まで）
休 館 日　年末年始　入場料無料

※手袋資料館、てぶくろ直売所内部の写真は、日本手袋工業組合様の許可を得て撮影いたしました。紙面を借りまして御礼申し上げます。

Copyright(C) 2016 香川県社会保険労務士会.All Rights Reserved